

1 カムナホール

夏の夜露が降りて

月（空の甘美な支配者）が
カムナホールの館の塀と
生い茂る櫛の木を銀色に染めていた

下界では物音一つ聞こえなかった 5

（忙しい生活のざわめきも静まって）
ひとりの不幸な女の溜息だけが
あの寂しい館から流れていた

「レスター様」女は泣いた 「これが
あれほど誓って下さった愛なのでしょうが 10
わたしを この寂しい森のなかに置き去りにして
惨めにも閉じ籠めてしまわれたのですか

「二度ともうあなたは 愛の早馬駆って
昔愛した花嫁に逢いに来てはくださらない
その女が生きていようが 死んでいようが 15
（冷たい伯爵様） あなたには同じこと

「父の館で幸せに暮らしていたころ
こんなにひどい仕打ちを受けたことはありません
不実な夫を悲しむことも
恐怖に身の毛がよだつこともなかったのです 20

「夜明けとともに元気よく起き上がり
ひばりにも花にも負けず 陽気に美しく
そして 山査子^{さんざし}に飛んでくる鳥のように
わたしも 終日^{ひねもす}楽しくうたっていました

「もし わたしの美しさが取るに足らず 25
宮廷の女性^{ひと}たちに笑われるくらいなら

なぜ 父の館から奪い去られたのですか

あそこでは（せせら笑う伯爵様） 大切にされていたのです

「あなたが初めて言い寄られたとき

わたしがどんなに美しいかと よく口にされました

30

そして 誇らしく口説き落とし 実をもぎ取って

それなのに 花を萎れるままになさいます

「そうです 今や顧みられず 蔑^{さげす}まれ

バラは色褪^あせ ユリは枯れ果てました

かつては その美しさをあれほど称えたお方

35

今ではその方の所為^{せい}で 花の美しさも消えました

「そうではありませんか 悲しみの病^{かか}に罹り

優しい愛の報^{さげす}いが 蔑^{さげす}みならば

どんなに素敵な美しさも 損なわれてしまいます

嵐に耐えうる花など どこにありましょう

40

「聞^きくところ 宮廷には美しい女王様がいらして

仕える女性^{ひと}たちも みんな稀なる美しさとか

陽^ひも恥^はじ入る あの東の国の花さえも

美しさ鮮やかさで かなわないとか

「伯爵様 どうしてあなたは

45

バラやユリが咲き競う花園を捨てて 桜草を求めにいらしたの

華やかな花々と比べれば その色の淡さなど

たちまち褪^あせてしまうとわかっていながら

「もともと わたしは野に咲く一輪の花

野原では野の花さえも美しい

50

誰か田舎の若者が摘み取っていれば

誰よりもわたしを美しいと愛^めでたかもしれません

「でも レスター様（あるいは 誤解でしょうか）

わたしから愛の契りを奪うのは 美しい女性^{ひと}ではなく

金箔の王冠への野心 それこそが

55

あなたの賤^{いや}しい妻のことを忘れさせるのでしょうか

「それならどうして レスター様 繰り言になりますか
（傷ついた者の愚痴をお赦ゆるしてください）
どうして 田舎娘と結婚なさったりしたのです
どんな美しい王女様でも娶めとることができたあなたが 60

「どうして この賤いやしい美しさをお褒めになって
ああ しかも後では枯れるままに放っておかれるのです
どうして わたしを奪って腕に抱き寄せ
しかも後では 日がな一日悲しむままに放っておかれるのです

「村の貧しい娘たちは 65
わたしに出会うと 恭うやうやしく頭を下げます
羨まし気に 絹の裳裾もすそに目をやって
伯爵夫人に悲しみがあるなどとは 思いもしません

「素朴ニンフな村娘たち 自分たちの方が 70
どんなに幸せかなど 思いもしません
悲しみに溜息つくより悦びに微笑むことが
高貴であるより低い身分に満足することが どんなに幸せか

「彼女たちよりわたしの方が遥かに不幸
毎日不安のために悲しみ やつれ
幹から折れた哀れな小枝のように 75
冷たい空気がはだ膚に染みます

「（残酷な伯爵様） わたしには
孤独という つましい楽しみも味わえません
鼻高い家臣たちが 静かな心を乱します
嫌みに眉をひそめたり ひどい陰口言って 80

「昨晚 悲しい気持ちで散歩していると
村の吊いの鐘がわたしの耳うを襲ちました
家臣たちが目配せし ひそひそと言っているよう
『伯爵夫人 ご準備を いよいよお終しまいです』と

「村の百姓たちが幸せそうに眠っている今 85

わたしは独り寂しく ここにすわっています
むこうの山査子さんざしに止った小夜鳴鳥ナイチンゲールのほかは
わたしが泣いても 慰めてくれるものとおりません

「気は萎え 希望も薄らいでゆきます
あの恐ろしい吊いの鐘が 今もなお耳うを襲うちます 90
次から次に虫が知らせます
『伯爵夫人 ご準備を いよいよお終しまいです』と」

このように悲しく痛ましく 夫人は嘆き
寂しく暗いカムナホールで
なんども 心の底から溜息ついて 95
さめざめと悲しみの涙を流した

そして 夜が明ける前
寂しく暗いカムナホールで
耳をつんざく無数の叫びが
死の恐怖につつまれた無数の悲鳴があがった 100

死を告げる鐘の音が三度 鳴らされ
風の精の呼ぶ声がした
カムナホールの塔のまわりで
カラスが三度 羽ばたいた

マスティフ犬が村の入口で吠えたと 105
櫛の木が芝生の上で震えた
それは悲しみの時刻とき もう二度と
あの不幸な伯爵夫人の姿を見たものはない

そしてあの館では二度と再び
楽しい宴うたげも華やかな舞踏会も催もされない 110
というのも その悲しみの時刻とき以来
カムナホールに幽霊たちが住みついたから

村の娘たちは 恐ろしそうに目をやるだけで
苔に覆われた古い館の塀を避けて通り
カムナホールの森で 115

楽しく踊ることもない

旅人たちが 通りがてらに目をやって
幽霊たちの住むカムナホールの塔を見上げ
物思わし気に溜息ついて
伯爵夫人の死に涙を流すという

120

(山中光義訳)